Akita University

秋田大学教育学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　52　pp. 125～133.　1997

留学生と地域語
—秋田における接触状況と学習意識の調査研究—

松岡洋子*・太田寿男**・宮本律子***

Foreign Students and a Local Language
—A Survey of linguistic contact and motivation for learning a local language in the Akita area—

Yoko MATSUOKA, Hisao OTA and Ritsuko MIYAMOTO

Abstract

Recently the number of international students studying in the areas outside of Tokyo is increasing. The tendency has stimulated active researches of non-standard dialects, namely local languages, in the Japanese language education.

However, researches of the sort have not been done in the Tohoku area including Akita. Therefore, there are not enough basic descriptive data which are good for academic studies. This paper is based on our survey of linguistic attitudes of students toward indigenous variation of Japanese in the Akita area, and communicative problems that they encounter and their motivation to learning a local language. The results show that there are needs from students to learn how to comprehend the language but not necessarily to speak it. What is proved to be significant in this study is that teaching materials and methods should be prepared systematically so that students can utilize when they feel necessity of learning a local language.

1. はじめに

近年，首都圏ではなく地域で学ぶ留学生が増えている。それに伴い，日本語教育の現場でも地域語の問題が取り上げられるようになってきた。しかし，秋田を始め，東北地域においては日本語教育の現場で地域語教育を行っている例は希であり，また，そのための基礎研究も少ない。ここでは，秋田大学の留学生の地域語との接触状況，地域語に対するイメージ，地域語を理解できないために起こるコミュニケーション上の困難，地域語学習に対する意識等についての調査結果を元に，地域語教育の必要性，問題点について論じる。

2. 調査の概要

2.1. 調査方法と時期

佐治（1988），佐藤（1995），早野（1996）などの調査を参考に項目を決め，質問紙法による調査をした。まず，「日本事情IV」の授業で会場式の予備調査を行い，質問項目に修正を加えた後，郵送法により本調査を実施した。調査時期は1996年11月及び12月である。

2.2. 対象

調査対象は秋田大学の留学生127名で69名（男性46名，女性23名）の回答を得た（回収率54.3%）。

2.3. 内容

被調査者の属性として，性別，国籍，在住期間を尋ね

*　秋田大学非常勤講師　Yoko Matsuoka, Part-time Lecturor, College of Education, Akita University
**　秋田大学非常勤講師　Hisao Ota, Part-time Lecturor, College of Education, Akita University
***　秋田大学教育学部　Ritsuko Miyamoto, College of Education, Akita University

Akita University

た。次に，言語（いわゆる共通語と秋田の地域語）とその使用地域（東京と秋田）の好き嫌い，地域語との接触状況，地域語学習に対する意識，地域語に対するイメージについて，それぞれ質問を試みた。なお，留学生が「地域語」ということばになじみがないと思われたので，調査紙では「秋田弁」ということばを使用した。使用言語は，留学生の共通言語である日本語とした。調査用紙は末尾に添付する。

3. 調査結果

3.1. 被調査者の属性

アンケートの被調査者の国籍は14カ国にわたる。一番多いのは中国（30名：43.5%）で，以下マレーシア（13名：18.8%），アメリカ，インドネシア，台湾（各4名），韓国，タイ（各3名）オーストラリア，フィリピン（各2名），ロシア，オーストリア，ノルウェー，ルーマニア，トルコ（各1名）である。平均在住期間は27.6カ月である（最短：1カ月，最長62カ月）。

3.2. 秋田・東京の言語と地域の好悪

まず，留学生が秋田の地域語と共通語についてどのように感じているか知るために，それぞれを好きか嫌いかを尋ねた。共通語は「好き」という回答が圧倒的に多かったが，秋田の地域語に対しては「どちらとも言えない」という回答が多くなっている。また，共通語に対しては見られない「嫌い」という回答が秋田の地域語に対しては約1割現れている。一方，言語と対照させるため，便宜的に共通語主流地域の東京と秋田のそれぞれの地域が好きか嫌いかを尋ねた。結果は言語とは対照的に，秋田には好意的な反応が多数であったが，東京に対しては「嫌い」という回答が1割強見られた。

3.3. 秋田における地域語との接触

留学生は地域語とどのように接触しているのだろうか。まず，秋田の地域語話者の友人の数をたずねたところ，5人未満という答えが一番多く（46名：66.7%），次いで10人以上(13名：18.9%)，5～10人(10人：14.5%)という結果が出た。

表1　秋田・東京の言語と土地の好悪

		好　き	嫌　い	どちらともいえない
言語	秋田地域語	15(21.7%)	8(11.6%)	45(65.2%)
	共通語	56(81.2%)	0	13(18.8%)
地域	秋　田	52(75.4%)	1(1.4%)	16(23.2%)
	東　京	28(40.6%)	10(14.5%)	31(44.9%)

秋田の地域語を聞いたことがあるかという質問に対しては，大多数(95.7%)が聞いたことがあると回答している。

次に，留学生がどのような場面で，どのような相手から秋田の地域語を聞いているかを尋ねた結果が表2である（複数回答）。一番多いのは近所の商店や大家・管理人で，過半数の留学生がこの項目を選んだ。次いで，学生，駅員，ホームステイ先などが続く。このように，地域語を耳にする場面は，研究や学習の場面ではなく日常生活場面であることがわかる。

一方，秋田の地域語を自らが話した経験についての質問では，約半数（44.9%）の学生が使用経験が「ある」と答えた。場面（相手）としては「友人」(13名)「教室」(12名)「アルバイト先」(12名)「ホームステイ」(8名)「酒場」(1名)などがあげられている。留学生が秋田の地域語と以外に積極的に関わっている様子がここで窺える。

3.4. 地域語学習に対する意識

秋田の地域語を習いたいと思うかという質問に対して6つの選択肢を与えて，地域語学習に対する意識を探った(表3)。「よく使うことばだけ，聞けば理解できるようになりたい」という回答が一番多く（34.8%），2番目の「よく使うことばだけ話せるようになりたい」(21.7%)を合わせると，過半数の留学生が日常会話程度の地域語を学習したいと考えていることになる。しかし，共通語と同程度に地域語能力の習得を望む回答は理解，使用併せて約16%で，反対に「習いたくない」という拒否反応が約17%である。早野(1996)は大塚(1993)，備前(1991)の調査をまとめ，東北（仙台）地方の留学生は東京，近畿の留学生と比較して地域語学習意識が消極的であることを指摘しているが，秋田の調査でも同様の結果を得たといえる。[1)]

表2　留学生が秋田の地域語を聞く場面

順	場面（話者）	人（%）	順	場面（話者）	人（%）
1	近所の店の人	39(59.1)	11	レストラン・喫茶店の人	25(37.9)
2	大家・管理人	39(59.1)	12	大学生協の食堂の人	22(33.3)
3	学生(教室以外で)	33(50.0)	13	バスの運転手	19(28.8)
4	駅員	32(48.5)	14	銀行・郵便局の人	17(25.8)
5	ホームステイ先	31(47.0)		大学生協の売店の人	17(25.8)
6	学生（教室で）	30(45.4)	16	教師（教室で）	14(21.2)
	アルバイト先	30(45.5)		教師(教室以外で)	10(15.2)
8	タクシー運転手	28(42.4)	18	老人	6(9.1)
	大学の事務室	28(42.4)		友人(学生以外)	5(7.5)
10	デパート・スーパー	27(40.9)	20	催し物で	1(1.5)

N = 66

Akita University

表3　留学生の地域語学習意識

回　　答	人（%）
よく使うことばだけ聞けば理解できるようになりたい	24(34.8)
よく使うことばだけ話せるようになりたい	15(21.7)
習いたくない	12(17.4)
共通語と同じくらい聞けば理解できるようになりたい	6(8.7)
共通語とおなじくらい話せるようになりたい	5(7.2)
習いたいが時間がない	5(7.2)
無回答	2(2.9)

3.5.　秋田の地域語イメージ

秋田の地域語に対する留学生のイメージを確認するために佐藤（1995）の調査を参考にして質問した。図1はその結果を加点法で処理して，それぞれの平均値を示したものである。

この中で，「早い」（平均値2.01），「聞き取りにくい」（平均値4.24）「田舎っぽい」（平均値4.11）の3つが特徴的な反応である。「早い」については，一般に未知の言語は早く聞こえると感じることが多いことから，秋田の地域語にあまりなじみのない留学生には早口に聞こえるのではないかと推測される。「聞き取りにくい」についても同様の推測が可能であるが，あるいは秋田の地域語独特の音声上の特徴（いわゆるズーズー弁）に対するイメージであることも考えられる。「田舎っぽい」に関しては，秋田の地域のイメージを言語に対しても当てはめているためではないかと考えられる。

3.6.　地域語との接触でおこる困難

秋田の地域語との接触場面で困った経験について3つの選択肢を与えて尋ねた（複数回答）。ここでは，地域語の受容場面に限った選択肢を与えた。「相手の言うことがわからなくて会話ができなかった」という回答が一番多く（36.2%），「相手の言うことがわからなくて用事ができなかった」「相手の言うことを間違って聞いて失敗した」は共に15.9%である。具体的にどのような困難があったかはここでは尋ねていないが，留学生が日常生活で地域語に悩まされた経験があることは事実のようだ。しかし，無回答が半数以上見られることから，地域語で困る場面はそれほど多くないということも考えられる。（表4参照）

表4 地域語で困った経験

回　　答	人（%）
相手の言うことがわからなくて会話ができなかった	25(36.2)
相手の言うことがわからなくて用事ができなかった	11(15.9)
相手の言うことを間違って聞いて失敗した	11(15.9)
無回答	39(56.5)

＊困った経験を選択した学生は30名（表は複数回答の結果）

3.7.　項目間の関連性

ここでは，アンケートの各質問に対する反応間の関連性を見ることで，秋田の地域語に対する留学生の意識を詳しく検討する。

3.7.1.　地域に対する意識と地域語に対する意識の関連性

地域と地域語に対する好悪の意見の関係をクロス集計表によって示した。

表5(ア)の秋田の地域語に対する好悪と，地域に対する好悪との間には有意な関連性が認められる。（$\chi^2 = 12.369$　$p < .05$）ここでは，「秋田が好き」な学生は「秋田の地域語が好き」だと答える傾向が少し見られる。（C＝.392）

一方，共通語と東京に対する好悪の意見の間には，秋田の地域と地域語のような関連性はない（$\chi^2 = 1.056$　$p > .05$）。共通語は留学生にとっては標準語（正しい日本語）であって，東京で使われていることばという認識はないのだろう。東京の地域の好悪と結びつけては捉えていないことがこの結果から窺える。

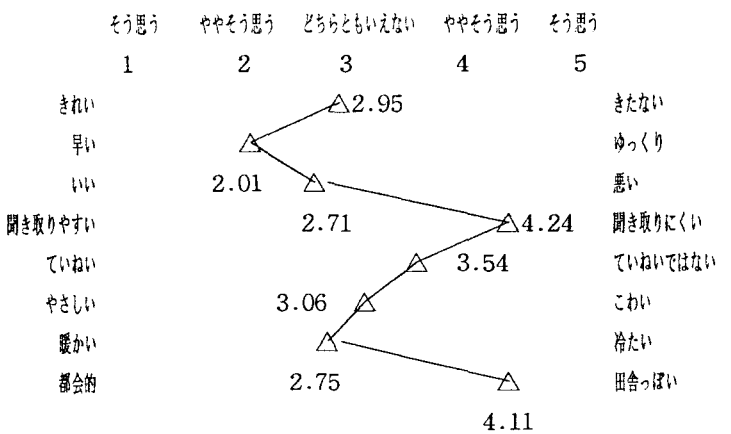

図1　秋田の地域語に対するイメージ

Akita University

表5　土地と言語の好悪の関連性

(ア)

秋田	言語 / 地域	秋田の地域語		
		好き	嫌い	どちらともいえない
	好　き	19.1	4.4	51.4
	嫌　い	0	0	0
	どちらともいえない	14.7	7.4	8.7

(イ)

東京	言語 / 地域	共　通　語		
		好き	嫌い	どちらともいえない
	好　き	33.3	0	7.3
	嫌　い	11.6	0	2.9
	どちらともいえない	36.2	0	8.7

(単位は%)

3.7.2.　秋田の地域語の好悪とイメージとの関連性

秋田の地域語の好悪と秋田の地域語に対するイメージとの関連性を見るため，秋田の地域語に対する反応別に，(a)「好き」，(b)どちらともいえない，(c)嫌い，の3つのグループに分けて，地域語に対するイメージをそれぞれ加点法で処理して図2に示した。

どのグループも同じような傾向を示しているが，bグループは全体的に否定的なイメージに偏り，aグループは肯定的なイメージに偏っている（$t = 3.5199$　$p < .01$）。つまり，地域語が好きな場合，地域語のイメージは良く，嫌いな場合はイメージも悪い。地域語の好悪とイメージは密接な関連性があるといえる。

3.7.3.　学習意識と関連のある要素

3.7.3.1.　国籍・在住期間・友人数・地域語での困難の経験・地域，地域語の好悪と学習意識

留学生の地域語学習に対する意識が他のどのような要素と関連性があるか知るために，他の質問項目と学習意識とをクロス集計して検定した結果が表6である。ここでは6つの質問項目との関連性を調べたが，国籍，在住期間，秋田の土地に対する好悪の3つの項目については関連性が見られなかった。

表6　学習意識との相関関係

項　　目	χ^2	相関
国　籍	3.59	—
在住期間	6.30	—
地域語話者の友人数	22.39＊	.500
秋田（地域）の好悪	13.61	—
地域語での困難の経験・未経験	24.22＊	.510
秋田の地域語の好悪	83.11＊	.747

＊.05で有意

関連性が見られたのは秋田の地域語話者の友人の数（$\chi^2 = 22.39$　$p < .05$）と，地域語での困難の経験（$\chi^2 = 22.39$　$p < .01$），秋田の地域語に対する好悪（$\chi^2 = 83.11$　$p < .05$）の3項目である。

まず，友人の数との関連性についてであるが，地域語話者の友人が多い留学生は秋田の地域語との接触の機会が多く，必要性が高くなるため学習意識も積極的になるのだろうか。そこで，友人5人未満，5～10人，10人以上の各グループの学習意識を加点法で処理し[3]その平均値を見た。友人5～10人のグループ（X = 2.20）が一番高く，次いで友人10人以上のグループ（X = 1.42）で，一番平均値が低いのは友人5人未満のグループ（X = 1.11）である。つまり，友人5～10人のグループは秋田の地域語学習に対する意欲がもっとも高く，友人5人未満のグループは学習意欲が低いということである。また，友人が10人以上のグループの中の25%，友人が5人未満のグループの20%の学生が地域語学習に対して否定的な反応を示しているが，友人5～10人の中間グループでは拒否的な反応はない。単純に，友人が多ければ多いほど，学習意欲が高くなるということではないようだ。

次に，地域語での困難の経験との関連性には興味深い結果が見られる。困難の経験があると回答したグループと無回答（困難の経験がないと捉える）グループの学習意欲を上の項目と同様に加点法処理の平均値を比較すると，困難を経験したグループ（X = 0.833）の方が，未経験グループ（X = 1.641）より学習意欲が低いことが明ら

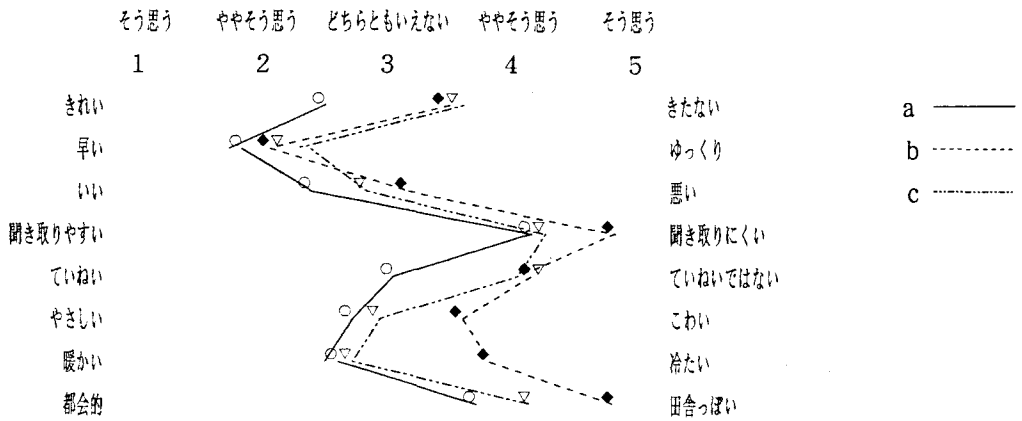

図2　秋田の地域語の好悪とイメージとの関連性

Akita University

かになった。普通，困った経験があれば学習の必要性が高まり，学習意欲もそれに従って高くなるであろうと思われるが，この調査では逆の結果が認められたことになる。

3つ目の，秋田の地域語の好悪と学習意識の2項目間には，より高い関連性が認められた。秋田の地域語が「嫌い」と答えた学生の62.5%は地域語学習に対して拒否反応を示したが，秋田の地域語が「好き」な学生で地域語学習に対して拒否反応を示した学生はいない。学習意識を加点法で処理した平均値は秋田の地域語が「好き」というグループが一番高く（X = 2.73），次いで「どちらでもない」グループ（X = 1.14），「嫌い」なグループ（X = 0）という順になり，地域語に対する好悪は地域語学習意識と高い相関関係がある（C = .747）ことがわかる。これは，備前（1991）および早野（1996）の調査と同様の結果で，地域語が好きな学生は地域語学習意欲も高いということである。

3.7.3.2.　地域語イメージと学習意識

秋田の地域語に対するイメージと地域語の学習意識は関連性が高い。まず学習意識と秋田の地域語に対する8つのイメージとをクロス集計して統計的検定を行った（表7）。「早い」「聞き取りやすい」「都会的」の3項目は関連性がなく，他の5つのイメージとは高い関連性が認められた。特に「きれい」「丁寧」の2つのイメージについては高い相関関係が認められる。すなわち，秋田の地域語が「きれい」だ，「丁寧」だと感じる学生は学習意欲が高く，逆のイメージを持つ場合は学習意欲が低くなる傾向がある。これも，備前（1991）早野（1996）の調査と同じ傾向を示している。

4.　考　　察

4.1.　秋田での地域語教育の必要性

今回の調査では程度の差はあるが，多くの留学生が秋田の地域語を学習したいと考えていることが明らかになった。では，留学生はなぜ地域語を学習したいと考えているのだろうか。今回の調査ではその点については触れなかったが，考えられる理由として次のようなものがあげられる。

(1)地域の人と話し合うため
(2)地域語が理解できないことによって生じるトラブル，誤解を避けるため
(3)研究（調査など）のため
(4)地域語に興味がある

まず，(1)にあげた「地域の人と話し合う」目的はどのようなものだろうか。地域のコミュニティで何らかの必要が生じて地域の人々と話し合わなければならないことがあるかもしれない。例えば，大家との会話や居住地域の自治会活動，緊急時の情報収集や相互扶助などの際に，地域語の理解が必要になるかもしれない。また，地域の人々ともっと親密になりたいが地域語が障害になっていると感じることは，日本人の他地域からの移入者も，外国人の場合も同様であると想像される。つまり，話し合う目的とは，一つには必要に迫られた受容的なものであり，もう一つは親密度を高めるための自発的なものと言える。

(2)は今回の調査でも若干見られたが，地域語が理解できないために必要な用事を足すことができなかったり，誤解を招いたりすることがあるため，地域語の理解が必要だと感じることがあるようだ。これは上記の(1)の受容の目的とも関連する。佐治（1988），ロング（1992）らは，留学生の経験した事例をあげながら，生活上困らないように，地域語を聞いて理解できる程度には体系的に教えるべきであると主張している。

(3)については，他とはレベルが異なり，その地域に関連する研究を取り上げない限りにおいて多くの留学生にとっては無縁であるが，留学生の多様化と共にこのような需要による地域語教育が必要になることも予想される。例えば，筆者の知る事例では，日本人の言語生活について社会言語学的に研究しようと考えた留学生が，秋田で調査をする際に地域言語的要素をどのように扱うべきか困ったことがある。この例では，留学生がアンケート調査や音声資料の分析の際に地域語の体系的な知識が必要となったが，そのための資料は俚言集的な辞書など限られたものしか見つからず，留学生にとっては困難を極めた。地域語とは元々それが使用されている地域居住者だけの言語であり，「学習」する言語という視点はこれまでなかった。しかし，今後は地域語も日本語教育同様，「外国語として」の体系的研究が必要になるであろう。

秋田大学の留学生が，上にあげたどの理由で地域語学習を希望しているのか不明確だが，日常会話レベルの地域語習得を望んでいる留学生が多いことは今回確認でき

表7　学習意識とイメージの関連性

イメージ	χ^2	相　関
きれい	42.53＊＊	.635
早い	13.35	
いい	34.14＊	.593
聞き取りやすい	19.15	
丁寧	39.80＊＊	.622
やさしい	32.98＊＊	.589
暖かい	36.81＊	.607
都会的	30.56	

＊ p < .05, ＊＊ < .01 で有意

Akita University

た。生越（1991）は，地域語教育では学習者の意見を尊重すべきだと述べている。その意見に従えば，秋田においても地域語教育を行うべきだと考えられる。しかし，留学生の学習意識が地域語に対するイメージや好悪に影響されていることや，地域語との接触場面で困難を経験した留学生の学習意欲が困難未経験者と比較して低いという調査の分析結果を見ると，留学生が本当に地域語教育を望んでいるのか疑問が残る。このことをふまえて，地域語教育の問題点について次に述べる。

4.2. 地域語教育の問題点

日本語教育の立場から地域語教育を行う際には，留学生の学習意欲だけでなく，留学生にとって地域語を学ぶとはどのような意味があるのか考慮しなければならない。

多くの留学生は日本語習得が最大の目的ではなく，日本語は学問・研究や生活に必要な道具である。言語の習得のために使える時間は限られている。共通語の学習に費やされる時間でさえかなりの負担であるのに，その上地域語までも教室で扱うことになれば，早野（1996）も述べているように，そのための時間，労力の負担は留学生にとって過大なものになる恐れがある。

また，たとえ日常会話でも留学生が地域語を使った場合，それを受け取る地域のネイティブの人々の反応については，真田（1992）の指摘にもあるように，好意的なものばかりではないことが予想される。特に東北地方は佐藤（1995）の調査によると，自分たちの地域語に対する劣等感のようなものが強い。留学生がそのような地域語を使うことで，受け取る側は不愉快に感じる危険性がある。この点は，秋田の地域語話者が留学生の地域語使用に対してどのような受容態度をとるのか調査をしなければならない。しかし，いずれにしても地域語を使用することによるこのようなリスクが予想されることは留学生自身が認識しておく必要がある。さらに，留学生の地域語イメージや地域語話者の友人の数，地域語との接触による困難の経験・未経験の違いによって地域語学習に対する意欲が異なる点にも注意しなければならない。例えば留学生が秋田の地域語に対して負のイメージを持っている場合，なぜ，負のイメージを持つようになったのか考慮しなければ，地域語教育は留学生に拒否されて失敗する恐れもある。

では，地域語教育は行うべきではないのだろうか。次に，地域語教育の可能性について考えてみよう。

4.3. 実用的な地域語教育の可能性

外国人である留学生が地域語を使用することによるリスクを避けるためにも，学習にかかる時間，労力の負担を軽くする意味でも，教室での地域語教育は理解の範囲にとどめることが妥当である。今回の調査で留学生自身の学習希望としても，一番多いものは日常会話を理解できるようになりたいというものであり，学習者の意志を尊重するという観点からも地域語を「聞いて理解できるようになる」ための教育について，その可能性を探ることが有用だ。

では，実際にどのような地域語教育を行ったらいいのだろうか。ここで，まず必要となるのは留学生が接する地域語の分析である。項目としては次のものがあげられる。

①場面（場所・相手・場面の全体的な会話の目的・待遇表現も含む）
②機能（発話機能）
③使用地域語の音声的特徴（アクセント・イントネーション・発音）
④使用地域語の語彙的特徴（俚言・共通語と同形の変容語彙）
⑤使用地域語の文法的特徴
⑥使用地域語の表現の特徴（俚言・共通語と同形の変容表現形）

これらは，留学生が遭遇する地域語に限定した上で調査・分析が行われなければならない。つまり，地域語は相手による使い分けが行われており，備前（1993）は外国人相手に使用される地域語は「東京から転居してきた20～30才代の，最近親しいつきあいをするようになった人」に対して使用されるレベルと同様のものと述べている。詳しい調査を待たなければ断言できないが，筆者の印象では，秋田の場合，地域人同士で話すときと他地域の人との会話では地域語の使用レベルがかなり異なると思われる。地域語のネイティブ同士の会話を分析するのではなく，今回の調査で明らかになったような，近所の店，ホームステイ先など，留学生がよく地域語と遭遇する場面において，地域の人と留学生とどのような会話が行われているか，実場面の録音資料を採集し分析しなければならない。

次に，上で明らかになった各項目の中でどれが留学生にとって困難であるかを知るために，項目別のテストを留学生に対して実施し，地域語の聞き取りによる理解を妨げる要因を把握する。例えば，発音による聞き取りの困難があるかどうか確認するために，発音のみ異なる共通語談話と地域語談話を聞かせ，理解力の差を見る，といった方法である。

それから，今回の調査では詳しく行わなかったが，留学生が地域語との接触において経験している困難について具体的な例を調べる必要がある。この分析によって，教材として取り上げるべき場面，言語要素などをより実

Akita University

生活に役立つものに近づけることができる。

上記のような分析資料に基づいて，初めて「理解力を習得するための教材」の作成が可能となる。ここでいう理解力とは「地域語を聞いて意味がわかる」ということだ。従って，学習項目を体系的に整理した教科書（参考書）も必要ではあるが，それ以上に，場面や状況が把握しやすいビデオ，音声テープなどの視聴覚教材が効果的である。

5. まとめ

留学生に対して地域語教育を行うことによる利点とは何か。それは，

・地域語使用場面での誤解や失敗を回避できる
・地域社会で得られる情報量が増える
・地域語話者と親密になる機会が増える
・地域および地域語に対する理解が深まる

と，いったことだろう。今回の調査では地域語に対するイメージや好悪が負の場合，学習意欲も低くなるという結果が得られたが，逆に地域語を学習することがイメージや好悪に影響を与えるのではないだろうか。また，地域語との接触で困難の経験がある留学生は未経験の留学生より学習意欲が低いという今回の結果の要因は，地域語との負の接触経験が地域語に対して拒否反応を生じさせたためであるとは考えられないだろうか。あるいは，地域語話者自身が自分の地域語に対して負のイメージを持つ場合，留学生にもそのイメージが伝わっている可能性もある。

地域語を学習するか否かは，最終的には留学生自身の判断に任せるべきである。地域語が必要であるか不必要であるかは，留学生の生活態度に深く関わる問題であり，地域語が理解できなければ留学生活に著しく支障を来すとは言えないからである。そのことは，今回の調査においても，地域語との接触で困難の経験がない留学生の数をみれば明らかであろう。

しかし，多くの留学生が地域語学習を希望していることを考えると，日本語教育の立場から留学生が地域語と自分の意志で関わるための支援を行うべきである。そこで重要なことは，地域語を「学習が可能な言語」として体系化することだと結論できる。

注

1) 早野(1996)によると，東京，仙台，近畿地方のそれぞれの地域の留学生対象の調査結果では，東京の留学生は東北地方の留学生と比較して地域語学習に意欲的であるとしている。

2) ここでは，対立するイメージを，左側に肯定的なイメージ，右側に否定的なイメージとなるように同列に提示し，左側の肯定イメージから順に「そう思う」1点，「ややそう思う」2点，「どちらともいえない」3点，否定的イメージの「ややそう思う」4点，「そう思う」5点と加点法で反応を処理し，全体の平均値を図1に示した。なお，「早い」と「ゆっくり」の対立は肯定的，否定的という観点からはずれるが，「早い」（1点）から「ゆっくり」（5点）へ並べて便宜的に同様に処理した。

3) 学習意欲に対する反応を，A = −1, B = 1, C = 2, D = 3, E = 4, F = 0 と得点化して処理した。得点が高いほど学習意欲が高いと解釈する。

参考文献

生越直樹(1991)「日本語教育と方言」『新・方言学を学ぶ人のために』（世界思想社）

佐治圭三(1988)「日本語教育における位相問題」『国語学』154

佐藤和之他（1995）『変容する日本の方言』（大修館書店）

佐藤和之(1996)『方言主流社会—共生としての方言と標準語—』（地域語の生態シリーズ東北編）（おうふう）

真田信治(1992)「方言の状況と日本語教育」『日本語教育』76

ダニエル・ロング（1992）「日本語教育における「方言教育」の問題点」『日本語教育』76

早野慎吾(1996)『首都圏の言語生態』（地域語の生態シリーズ関東編）（おうふう）

備前徹(1991)「外国人留学生の近畿方言受容意識」『国語学』166

———(1993)「日本語教育における方言」『方言と日本語教育』（大蔵省出版局）

Akita University

秋田方言についてのアンケート

性別：　男　　女
国籍：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1.秋田にどのぐらい住んでいますか。
＿＿＿＿年＿＿＿カ月

2.秋田弁を話す友だちがいますか。
A.０～５人ぐらい　　B.５～１０人ぐらい　　C.１０人以上

3.あなたは秋田弁が好きですか。
A.好き　　B.きらい　　C.どちらともいえない

4.あなたは共通語が好きですか。
A.好き　　B.きらい　　C.どちらともいえない

5.あなたは東京が好きですか。
A.好き　　B.きらい　　C.どちらともいえない

6.あなたは秋田が好きですか。
A.好き　　B.きらい　　C.どちらともいえない

7.あなたは秋田弁を聞いたことがありますか。
A.ある　　B.ない

8.７で「ある」と答えた人は、どこで秋田弁を聞きましたか。
A（　）　教室で学生が話していた
B（　）　教室で教師が話していた
C（　）　大学の教室以外の場所で学生が話していた
D（　）　大学の教室以外の場所で教師が話していた
E（　）　大学の事務室の人が話していた
F（　）　大学生協の売店の人が話していた
G（　）　大学生協の食堂の人が話していた
H（　）　銀行、郵便局の人が話していた
I（　）　近所の店の人が話していた
J（　）　レストラン、喫茶店などの人が話していた
K（　）　デパート、スーパーの人が話していた
L（　）　駅の人が話していた
M（　）　バスの運転手が話していた
N（　）　タクシーの運転手が話していた
O（　）　大家、管理人が話していた
P（　）　ホームステイ先の家族が話していた
Q（　）　アルバイト先の人が話していた
R（　）　その他（

Akita University

9.あなたは秋田弁を話したことがありますか。
A.ある　　B. ない

10.9で「ある」と答えた人は、どこで話しましたか。
A(　)アルバイト先で話した
B(　)教室で話した
C(　)ホームステイ先で話した
D(　)その他(

11.あなたは秋田弁を習いたいと思いますか。(ひとつだけ選んでください)
A(　)習いたくない。
B(　)よく使うことばだけ、聞けば理解できるようになりたい。
C(　)共通語と同じぐらい聞けば理解できるようになりたい。
D(　)よく使うことばだけ、話せるようになりたい。
E(　)共通語と同じぐらい話せるようになりたい。
F(　)習いたいが、時間がない。

12.あなたは秋田弁についてどのように思いますか。

	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	ややそう思う	そう思う	
きれい						きたない
早い						ゆっくり
いい						悪い
聞き取りやすい						聞き取りにくい
ていねい						ていねいではない
やさしい						こわい
暖かい						つめたい
都会的						田舎っぽい

13. あなたは今までに秋田弁で困ったことがありますか。
(　)相手の言うことがわからなくて、会話ができなかった。
(　)相手の言うことがわからなくて、用事ができなかった。
(　)相手の言うことを間違って聞いて、失敗した。
(　)その他(

＊ありがとうございました。